

平成を駆け抜ける大口町 平成11年(1999)～平成20年(2008)

# 住民が主役のまちづくり

先月に引き続き、平成30年間の大口町の歴史をたどる第2弾。今月は、平成を3つに分けた真ん中の10年を振り返ります。

1999年  
平成  
11年

- 小口城址公園竣工
- 酒井鉄6代目町長に就任
- 朝市開始



- 自自公連立で小淵改造内閣発足
- 不況やリストラで平成10年から失業率が悪化
- 大型銀行の合併が相次ぐ

2000年  
平成  
12年

- 広報おおぐちA3↓A4サイズへ
- やろ舞い祭開催
- NPO活動促進条例制定
- 大口西小学校ビオトープ竣工



- 大型自然災害多発(東海豪雨、三宅島噴火など)
- 小淵首相が病気で倒れ、森連立内閣発足
- シドニー五輪で日本女性陣大活躍、高橋尚子選手が金
- 介護保険制度がスタート

2001年  
平成  
13年

- 大口南児童センター竣工
- SAKURA-SAKU〜大口音頭〜制作



- 小泉純一郎内閣誕生
- 日本でも狂牛病感染牛が見つかる
- 高橋尚子選手、ベルリンマラソンで、世界最高記録V
- イチロー選手が米大リーグ、ア・リーグ新人王とMVP獲得
- ミニニューヨークの世界貿易センタービルを一瞬にして崩落させた航空機テロ

2002年  
平成  
14年

- 町制40周年
- 第1回やろ舞い大祭開催
- 第1回伝統芸能発表会
- 大口町サイバータウンプラン



- 三位一体改革始まる
- 北朝鮮が拉致を認め謝罪。5人が24年ぶり帰国
- 住民基本台帳ネットワークがスタート







## 町制40周年(平成14年)

当時の酒井鉄町長の号令の下、4月より数々の記念事業が実施されました。

当時の担当職員は、町制40周年の担当課(当時の政策調整課)に異動後すぐに「40周年記念事業を企画するよつに」と命令を受けました。事業までの4か月間に、「協働」と「住民参画」をキーワードにし、町全体で実施する「骨太の基本事業」と、住民の皆さんから記念事業を募集する「公募事業」の2本の柱を決めました。さらに実行委員会を立ち上げ、酒井町長が当時掲げていた町の施策「参画と参加のまちづくり」をメインテーマに記念事業に向かって発進しました。

公募事業は、予想をはるかに超える多数の応募があり、選定委員会で精査して趣旨に合った40周年にふさわしい15の事業が選ばれ実施されました。

多くの記念事業の中でもとりわけ印象深かったのは「やろ舞い大祭」です。住民、企業、行政がタッグを組み、一緒になって創り上げたおまつり。企業にも積極的に参加者意識を持ってもらえるよう、資金や宣伝での協力をあおぎました。老若男女

2008年 平成 20年	2007年 平成 19年	2006年 平成 18年	2005年 平成 17年	2004年 平成 16年	2003年 平成 15年
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 愛知県植樹祭大口中学校で開催</li> <li>● みんなで考え・つくる（仮称）住民参加条例ができる</li> </ul> <p>※ソーシャルキャピタルランキング NPO 施策・市民活動の支援など『住民の参画と参加のまちづくり』の施策で大口町が高い評価を受けました。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 地域再生計画認定</li> <li>● (O・H・I・T・O・W・N) おおぐち構想</li> <li>● 大口中学校校舎竣工</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大口誕生100周年記念式典</li> <li>● 地域包括支援センター設置</li> <li>● あんしん安全ネット運用開始</li> <li>● 資源リサイクルセンター竣工</li> <li>● ※ソーシャルキャピタルランキング 全国第4位</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 愛知万博大口DAY参加</li> <li>● フレンドシップ事業</li> <li>● 国府宮裸祭大鏡餅奉納</li> <li>● 第6次大口町総合計画策定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 憩いの四季誕生（指定管理者制度）</li> <li>● 健康づくり計画「健康おおぐち21」策定</li> <li>● 大口北児童センター竣工</li> <li>● おおぐち元気戦隊タッシュシユマン誕生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 巡回バス運行開始</li> <li>● 生ごみ堆肥化デモプロジェクト開始</li> </ul>
 					
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 証券大手リーマン・ブラザーズが破たん</li> <li>● 秋葉原で無差別殺傷事件</li> <li>● 北京五輪で北島康介選手が競泳男子平泳ぎ2大会連続2冠</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 能登半島地震、新潟県中越沖地震が発生</li> <li>● 中日ドラゴンズ53年ぶりに日本一</li> <li>● 多治見と熊谷で40.9度、74年ぶり最高気温更新</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 安倍政権が誕生</li> <li>● トリノ五輪、フィギュアで荒川静香選手が金メダル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 平成の大合併進む</li> <li>● 兵庫県尼崎市のJR脱線事故で107人死亡</li> <li>● 愛知万博開催、2200万人が入場</li> <li>● 中部国際空港・セントレアが開港</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 新潟県中越地方で震度7を観測する大地震</li> <li>● 台風10個が上陸し全国各地で大きな被害</li> <li>● インドネシアのスマトラ沖で大地震。津波犠牲者多数</li> <li>● イチロー選手が年間262安打で大リーグ記録更新</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 阪神リーグ優勝、道頓堀川に3500人以上飛び込む</li> <li>● 米国とイラク開戦、フセイン元大統領を拘束</li> <li>● 松井秀喜外野手が大リーグ公式戦デビュー</li> </ul>



新たな感動 やろ舞の大祭

第一回

詳しくは <http://www.town.oguchi.aichi.jp/>

9月14日(土) 午後4時より8時30分

※雨天予備日 9月15日(日)

大口町総合運動場

みんなで一緒に盛り上げるぞ!

- 大口町民会館の親子踊り
- 音楽の囃子踊り
- SAKURA-SAKU
- 総踊り ~大口音頭~の披露
- SAKURA-SAKU-大口音頭-、とろこいよ、花まつり

の住民に参加してもらえよう、「鳴子踊り」を中心にプログラムを組むという工夫もしました。

やろ舞の大祭は、平成29年に16回を数え（平成30年は悪天候のため中止）、今では町内外問わず他県からも参加者が集う大口町を代表とする行事に育ちました。「事業を終えたとき、参加チームのみなさんが集まってくれて口々にお礼を言われたときは、感激で涙が出ました」と担当職員。

「数々の事業が住民団体主体でおこなわれましたが、当時は近隣他市町にそのような先例がなく、暗中模索でした。一緒に知恵を出し合ったり、協力する中で、住民団体のみなさんとの信頼関係ができました。当時一緒に事業をおこなった人たちとは今も声を掛け合う仲。固い絆で結ばれている「仲間」です」振り返れば、このような数々の事業があつてこそ、この後の大口町の「協働」の仕組み作り、元気なまちづくり活動の推進へとつながっていく足掛かりができていったのです。

### 町民の足、コミュニティバス の運行開始（平成15年）

平成3年に町内の路線バス（名鉄バス）が廃止になって以来、公共交通機関がなかった大口町。

高齢者や、車を持たない住民の「あし」として、また、町内企業へ通勤する車による渋滞の緩和や駐車場対策のため、そして排気ガス等環境汚染対策のために公共交通をという要望が高まり、平成15年3月、コミュニティバスの試行運行（運賃無料）

が開始されました。

当時の担当職員が苦労したのは、酒井鎮町長の「コスト意識を持って、運行経費の町負担額をできるだけ減らし、継続的に運行できるようにする」という方針を遂行すること。近隣にもこのような方針で運行しているコミュニティバスがなかったため、参考となるひな型がなく、試行錯誤が続きました。

平成17年8月より運賃を有料に。大人1乗車100円、小学生以下無料としました。

また、柏森駅、江南駅、布袋駅へ接続させ、ルート、ダイヤ、バス停設置などを配慮することにより、町内に多数存在する企業の通勤バスと



お出かけには、便利でお得な大口町コミュニティバスをご利用ください  
大口町 **みんなのバス** まさゆき  
基幹/巡回/通勤・通学バス路線図



▲当時の路線図

して利用してもらつたことを申し入れ、企業より支援費を確保しました。また、バスの車両ラッピングに企業の広告を入れてもらい、広告収入も得るようになりました。これらの収入と県からの補助金を合わせ、運行にかかる事業費を大幅に圧縮することに成功。

このような、「企業との連携によるコミュニティバスの運行」は、平成24年に愛知県の「エコモビリティラフ推進表彰」の第1回表彰3団体のうちの1つに選ばれました。とりわけ注目されたのは、朝の通勤通学の時間帯に、往路は町内から駅を利用する人に乗せ、復路は駅から町内企業へ向かう通勤客を乗せるという、



▲コミュニティバスサポート隊の皆さん

バスをより効率的に運行させる大口町独自の工夫でした。

その他にも、「全町ネットワーク制」をモットーとし、どこにいても300mほど歩けばバス停にたどり着けるようコースを設定。どんな狭小な道路にも入っていけるようワゴン型バスも導入しました。また、常にデータを取って便ごとの乗客数やバス停ごとの乗り降りの状況を把握し、毎年最適なダイヤを組み替えるようにしました。

「システムは、すべて自分たちの手作りで作成。ひな型がなかったからこそ好きなようにでき、無限に工夫の余地がありました。高齢者の運転

事故が多発している現在、これから「コミュニティバスが免許返納を促進するなど、社会問題を解決する手段にもなるでしょう。事業を始めたときには苦しかった思い出しがありませんでした。やり遂げた今は達成感でいっぱいです」と担当職員。

TOPIC

町制40周年記念講演会

町制40周年記念講演会に「昨今、失われつつある『人の心』『心の豊かさ』を求める中から、住民の皆さん自らが、まちに関わりを持ち、郷土への愛着を高めながら、真に『心の通うまちづくり』のあり様と、さらに20世紀の反省を踏まえて21世紀を示唆していただきたい」と、酒井町長みずから白羽の矢を立てたのが五木寛之さんでした。

五木さんは文壇の重鎮であり大人気作家。式典開催日までに1年を切っている中、3年先まで予定がビッシリということで困り果てました。

「ためなら、ご自宅の前で座り込みしてでも引き受けていただけ」との町長の熱い要望(?!?)に、最後の頼みの綱で、知り合いの出版社の方をお願いしたところ、「何とかアタックしてみましよう」と微かな望み。何通も何通も依頼文を作成しました。

平成24年には住民主導でバスを支援する「コミュニティバスサポート隊」が結成され、住民と行政が一緒に公共バスの問題を議論したり、より利用しやすい仕組みを考えたりしています。「コミュニティバスの運行が定着した今、行政は先頭に立って

月日だけが過ぎ、なんの音沙汰もなくまたも困り果てた頃、「大口町の講演希望日に、たまたまスケジュールが空いた」との連絡が…。何とか引き受けていただくことができました。

ほっと胸をなでおろしたのもつかの間、五木さんの事務所から「大変デリケートな方なので細心の注意を」と忠告を受け、常にヒビリながら度重なる打ち合せ。講演当日、ご本人は、とても和やかな方で、講演会「日本人のこころ」は大成功に終わりました。終始命の縮まる思いをしましたが(笑)、想い出に残る得難い経験ができました。(担当職員談)



引っ張るのではなく、住民を後ろから支える存在となる段階に入ったといえるでしょう。

住民の方から、「車で走る景色と、コミュニティバスから見える景色は、また違って見えるね」と声をかけてもらったとき、大口町のコミュニティバスが住民の『あし』として定着したことを実感したそうです。これからも、コミュニティバスが私たちのまちの財産、まちの宝として、ますます機能的に運行されるよう、住民の皆さん、行政、企業が力を合わせてアイデアを出し合い、時代に合わせ育てていかねばなりません。

取材にて

この平成中期の10年間は、「町制40周年」を契機に、現在の大口町の町政の方向性が定まった時期でした。町が掲げた「参画と参加のまちづくり」というキャッチフレーズに象徴されるよう、住民のみなさんが主体となってまちづくりを進めていくというスタンスの土台が固まり、あらゆる事業において常に優先されるも

のとなった時期でした。この後、平成21年の「まちづくり基本条例」制定を経て、大口町は住民自治のまちづくりへと着実に歩みを進めていきます。

40周年記念事業の冠をつけて開催された「桜並木健康ジョギング」「金助桜まつり」「れんげまつり」、骨太事業で開催された「やる舞い大祭」や、公募によって生まれた「ダンス&ミュージックフェスティバル」など、大口町の歴史や豊かな自然を生かした行事は、今年年間の恒例行事として定着し、町の魅力や住民の誇りを育む、なくてはならないものとなっています。すべての町民にとってのふるさとの象徴となる行事として、これからも末永く続いていくでしょう。

次回は、いよいよシリーズ最終回。平成21年から現在までの10年間の振り返ります。



取材・文/大口町NPO登録団体 ZOOM